

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	河井家文書と日本政治（河井重蔵・弥八を中心に）				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	森山 優
		所属・職名	千葉大学大学院国際学術研究院・教授	氏名	見城 悌治
		所属・職名	静岡県近代史研究会・会員等	氏名	北原 勤ほか2名
	発表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉

講演題目
『河井弥八日記』1939年より
研究の目的、成果及び今後の展望
本研究は、掛川市に残されている河井家文書を手がかりに、明治期と戦後の日本政治を中央・地方の両側面から多角的に照射し、政治史・地方史における新境地を開拓するものである。 本年度は、『河井弥八日記』1942年後半（8月～12月）の復刻作業と、通年分の索引作成作業を実施した。 この1942年は日記に加え、手帳にも日記を超える詳細な記述があるため、重複を厭わず復刻した。科研費の他に一回の読み合わせ、さらに分担者に割り当てての索引作成が、ほぼ終了した段階である。原稿の最終チェックと組版作業に入っている。 1939年は、9月に第二次世界大戦が始まった。まさに、この時期の校訂であり興味深い記述が見受けられる。その直前8月末にはドイツの独ソ不可侵条約締結という背信行為があったが、弥八は憤るより日本の孤立化を深刻に懸念していた（ちょうどノモンハンで日ソ両軍が衝突していたこともあるだろう）。弥八は外交関係の講演会には欠かさず出席しており、国際情勢への目配りを欠くことはなかった。ナチスとソ連に蹂躪されたポーランドに対しては、極めて同情的である。 中支（5月）に続き11月には、国内の傷病兵慰問に熱心に取り組んでいる。応召兵に対する敬意は並々ならぬものがある。それに対比するように、いわゆる国体論者や軍人が天皇に対する敬意を払っていないことを鋭く批判している。天皇の侍従次長として仕えた弥八ならではの。 また、地元においても、多額納税議員の立候補について調整したり（7月の日記補遺）、静岡育英会の寄附金集めのため浜松市を訪れて多くの名士に寄附を要請する（11月）など、精力的に活動している。 来年度早々に出版することで、1939年における弥八の活動の全体像が提示できることが期待される。